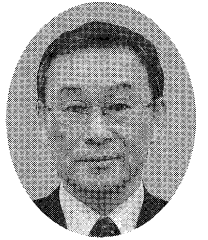


# 台湾と靖國神社



柚原正敬  
(日本李登輝友の会事務局長)

台湾と靖國神社の縁は深い。その最大の所以は、台湾は明治二十八(一九九五)年から昭和二十(一九四五)年までの五十年間、日本統治時代を経たことで、大東亜戦争では約二十一人万人が軍人・軍属として出征、そのうち戦歿された二万七千八百六十四柱が御祭神として祀られているからだ。

また、靖國神社の正門に当たり、両扉に直径一・五メートルにも及ぶ菊の御紋章が映える神門は昭和九年に竣工されている。ここで用いられている資材はすべて台湾の阿里山檜だ。今でも、近づけば檜の香が漂ってくる。

さらに、靖國神社では毎日必ず日章旗を掲揚しているが、大鳥居(第一鳥居)をくぐった左側に、高さ三〇メートルに及ぶ、まさに天を突くと云ってよい国旗掲揚塔があり、これは昭和五十一(一九七六)年に台湾軍第四十八師団復員者により寄贈されたものだ。

因みに、台湾では朝鮮に遅れること四年、昭和十七(一九四二)年に陸軍特別志願兵制度が実施され、同年の採用者数一千二十二人に対してなんと四十二万五千人も応募(倍率二四一・八倍)し、翌十八年には一千八人の募集に六十万人も応募(倍率二五九・六倍)する事態となった。昭和十九年から朝鮮と台湾に海軍特別志願兵制度が実施され、採用者数も二千四百九十七人に増員したため、倍率こそ三〇四倍と落ちたものの、七十六万人も応募していた。中には血書嘆願した者も少なくなかったという。

このような熱狂的と言っても過言ではないほどの志願兵への応募というものは、果たして世界に類例があるのだろうか。寡聞にして私は知らない。

ところが、このように自分たちの同胞が祀られているにもかかわらず、台湾の人々は靖國神社についてほとんど知らない。知っていても、参拝する人は少ない。例えば戦時中、神奈川県の高座海軍工廠で戦闘機の「雷電」の生産に汗を流した「台湾少年工」と呼ばれる人々がいる。働きながら学べるとして、台湾各地の成績優秀者が少年工に選抜され、昭和十八年から八千四百人余が軍属の身分で来日した。不幸にも、空襲で戦歿された方もいる。

現在、靖國神社には台湾少年工出身の戦歿者六十柱が祀られている。しかし、日本を「第二の故郷」と慕う台湾少年工たちでさえ、桜の季節には靖國神社を参拝し、大村益次郎の銅像の下で「同期の桜」や「台湾軍の歌」を歌いながらも、戦歿した仲間が祀られていることを知らなかったのである。

後日、南部宮司はその時のことを「歓談の中で李登輝先生の靖國に対する思いというものを改めて感じた」とつづり、「お帰りの際には、神社から差し上げた岩里武則命(台湾名・李登欽)の『祭神之記』をしっかりと胸に抱いて行かれたのが印象的でした」(李登輝訪日・日本国へのメッセージ)と述べている。

実は、この李氏の参拝には伏線があった。前年二月、南部宮司は日本李登輝友の会主催の天灯ツアーに参加して台湾を訪問している。靖國神社の宮司として初の台湾訪問だった。このとき、台湾李登輝之友会が催した春節(旧正月)祝賀宴に参加し、「老台北」で知られる蔡焜燦氏の導きにより、祝宴前にホテル内の別室で李氏ご夫妻とお会いしていた。会見の内容は詳らかではないが、靖國神社宮司との会見が参拝を促したことは想像に難くない。

李氏の靖國参拝は台湾でも新聞やテレビで大きく報道され、これ以降、靖國を参拝する台湾の人々が増えたと見られる。例え、昨年八月、NHK「JAPANデビュー」問題で来日した台湾の原住民パイワン族出身の李文来氏(医師)や、十月に来日してNHKを提訴した同じパイワン族出身の華阿財(元牡丹郷長)や、包聖嬌(華阿財夫人)、李新輝(元春日郷郷長)、洪金蓮(李新輝夫人)の四氏も、来日直後に参拝していった。

李登輝元総統を尊敬しているという李文来氏は八月十二日、パイワン族の衣装を身にまとい、念願だった昇殿参拝に臨んだ。参拝後、「僕たちは高金素梅と違って、僕たちの祖先が祀られている靖國神社にちゃんと参拝したいと思っています」と言った氏の晴れやかな笑顔は印象的だった。

華阿財氏たち四氏の参拝は十月六日だった。華氏と李氏の叔父が高砂義勇隊として出征し、共に戦歿していたことから、ぜひ参拝したいという意向だった。やはりパイワン族の衣装を身にまとって昇殿参拝したのだが、夫人たちの目は境内に入ったときから潤みはじめていた。

参拝後、応接室に戻って涙をぬぐいつつ「私たちは高金素梅とは違う。台湾の原住民はあのような騒動を好まない」「靖國で私たちの先祖にお会いした。大切に祀りされていることを知り感謝した。これで安心して故郷に帰れる」などと話すのを聞き、台湾でもお祭りを大事にし、守り続けるパイワン族の人々は今でも魂の存在を感じることができるとは聞いていないか、と心を打たれた。靖國神社を去るとき、夫人たちが本殿に向かって深く手を振って別れを告げる姿は、まるでそこに彼らの祖先が佇んでいるような仕草だった。

後日、靖國神社から華阿財氏と李新輝氏の叔父に関する御祭神調査の結果が届き、華氏の叔父は高木香と、李氏の叔父は確認に至らなかったが、大東亜戦争

の季節には靖國神社を参拝し、大村益次郎の銅像の下で「同期の桜」や「台湾軍の歌」を歌いながらも、戦歿した仲間が祀られていることを知らなかったのである。

それを知ったのはつい十年ほど前で、台湾少年工たちと交流を続けている野口毅氏(高座日台交流の会前会長)の尽力による。海軍少尉として台湾少年工の寄宿舎で寝起きを共にした野口氏が、戦歿台湾少年工の数が資料により異なっていることに気づき、靖國神社崇敬者総代を務める小田村四郎氏から、軍属なら靖國神社に祀られているという助言を得、靖國神社に台湾少年工出身の戦歿者が祀られていることを確認したことになる。

平成十一(一九九九)年四月、野口氏は台湾少年工出身者とともに初めて靖國神社に昇殿参拝している。その後、彼らは来日するたびに参拝しているという。

台湾の人々が靖國神社について知る最も大きな出来事はさらに後で、李登輝元総統が平成十九(二〇〇七)

年の来日時に参拝されたことに求められるだろう。

実兄が祀られる靖國神社に遺族として初めて参拝した六月九日、境内は早朝から報道陣や歓迎の人波であふれ、上空には数機のヘリコプターが舞うという騒然とした雰囲気の中に、静かな緊張感が漲っていたことを思い出す。

李氏は曾文恵夫人や作家の三浦朱門・曾野綾子夫妻などを伴って到着し、応接室に通されると、南部利昭宮司に「兄貴と僕は二人兄弟で仲がよかったです」と話し始め、「父は兄貴が死んだことを死ぬまで信じませんでした。気になって気になって仕方がなかった。今日、六十数年ぶりにやっ

と兄貴の慰霊ができます。ありがとうございます」と、くぐもる声で、目を潤ませながら静かに語った。隣室に控えていた私は込み上げて来るものを抑えられなかった。昇殿参拝が終わって応接室に戻ってくると、李氏は南部宮司に「長い間お世話になりました」と頭を垂れた。

この慰霊祭に、できれば台湾の御遺族をお招きしたいと考えている。それが新たな御遺族の発見につながることを期待するからである。

また、台湾には台湾出身戦歿者を祀る宝覚禅寺があり、李登輝氏が総統のときに揮毫した「靈安故郷」碑が建立されている。この慰霊碑の建立には日本人も協力している。そこで、靖國神社と宝覚禅寺が姉妹交流できないものかと密かに考えている。

国交のない日本と台湾において、姉妹都市交流を結んでいるのは岡山市と新竹市、仙台市と台南市、八王子市と高雄市など十六自治体

に及ぶ。秋田の田沢湖と高雄の澄清湖の姉妹湖の例もある。戦歿者を御縁とした姉妹交流が日台間にある方がむしろ自然である。台湾に靖國神社を知らしめる意味でも、その実現を切に願っている。